

# 「始皇帝の死」と 「始皇帝陵考」

粟 光行

## 1 始皇帝の死

始皇37（BC210）年、始皇帝は第5回目の巡幸に出発した。この巡幸の前年、「始皇死而地分」（始皇帝死して地分かる・・・始皇帝が死んで領土が分割される）の6文字が刻まれた隕石が墮ちてきた。

始皇帝は気になり占ったところ「巡幸すれば吉」の卦が出た。東方の中原と呼ばれる広大な地域の人心収攬のためにも始皇帝の巡幸は必要であった。そこで丞相の李斯（リシ）と末子の胡亥（コガイ）を同行して冬10月に首都咸陽を発った。始皇帝は馬車に揺られ会稽から呉へ、春の江南へ長江を下り、夏山東半島の黄海の海岸沿いに進み琅琊（ロウヤ）へ。始皇帝は斉や燕で流行していた方術（「不老不死の薬」を持ち空中を

飛翔する「仙人」の術）に興味を持ち、方士の徐福（ジヨフク）に「不老不死の仙薬」の探索を命じていた。琅琊へは徐福に命じた「不老不死の仙薬」を得る為であった。しかし徐福は大鯨に阻まれ「仙薬」を得る事が出来ず再度出かけるという。その夜始皇帝は人の姿をした海神と戦った夢を見た。この夢を占うと「夢は凶。これを取り除くためには、大魚を一匹でも射殺せば吉になります」と占夢博士は答えた。山東の海辺の厳しい日差しの中、始皇帝は舟を出し大魚を求めた。やっと大魚を発見し自ら弩を放し仕留める事ができた。

北国育ちの始皇帝にとって夏の盛り、山東の海辺の厳しい日差しに疲れを覚えた。生来虚弱の始皇帝はこの広い国土の長旅はかなり無理をしていた。早く咸陽へ帰りたいと思った。この度の巡幸は隕

石に刻まれた「始皇死而地分」の6文字に対し、「巡幸すれば吉」の占夢博士の言葉を信じ、長年の天下統一の精神的重圧から体調に少し不安があったが琅邪に行けば徐福が持ち帰るであろう「不老不死の仙薬」を手にする事が出来るとの希望からであった。しかし「不老不死の仙薬」を得る事が出来ず、体調は良くない。咸陽への帰国の途中、斉の平原県まで来たが病床に伏した。病気は日増しに重くなり、始皇帝の頭に「死」という言葉が現実を帯びて感じられた。天下は統一したがまだ流動的である。天下が固まっていれば優秀な補佐がつけば何とか治まるが、秦帝国はまだ固まっていない。しっかり者の長男扶蘇は北方蒙恬將軍の下にいる。始皇帝は死を悟り、扶蘇に「軍は蒙恬に任せ、咸陽に戻り、わが棺を迎え葬れ」との詔書を書いた。始皇帝は後を扶蘇に託した詔書に王爾を押し、宦官の趙高（チヨウコウ）に渡した。始皇帝は7月、50歳で沙邱（サキユウ）で崩じた。

## 2 二世皇帝胡亥

始皇帝には20数名の子供がい

るが、まだ後継者は指名されていない。丞相の李斯は公子間で争いが起き動乱になる事を恐れ、崩御を秘密にし、喪を発表しなかった。始皇帝の死を極秘にするため、お棺は窓を閉めれば温かく、開ければ涼しい輜輳車（オンリョウシャ）に乗せ、宦官を同乗させ、これに始皇帝に仕立て生前と同じように食事させ、奉書を決済させた。この事を知っているのは末子の胡亥と宦官趙高と始皇帝側近のごく少数の宦官だけであった。宦官趙高は扶蘇に賜った詔書を手で胡亥に皇帝になることを迫り、承諾させた。

始皇帝と秦帝国を作り上げた丞相の李斯に宦官趙高は「扶蘇に宛てた書簡と王爾が胡亥の手元にあります。扶蘇が皇帝になれば蒙恬を宰相に任命し、貴方が出る幕はなく、生命さえ危ういでしょう、胡亥を位に就ける方が得策です」と迫るが李斯は拒否した。趙高の「今や天下の権は胡亥にあり、胡亥の心をその気にさせる事が出来るのは私だけです。今この謀に従わなければ禍は子孫に及び将来心胆を寒くする事になります」との脅迫に屈し、李斯は趙高の謀

略に手を貸す事となった。そこで3人は密かに謀り、始皇帝の封じた公子扶蘇への詔書を破り、胡亥を皇太子とする始皇帝の遺詔を丞相李斯が沙邱で受けたと偽り、胡亥を皇太子に立て、扶蘇と蒙括の2人には死を賜る詔書を偽造して使者を出した。扶蘇と蒙括が命令通り自殺するまで始皇帝の死は伏せておかねばならない。始皇帝の棺は輜輳車に乗せ、怪しまれないように宦官を1人乗せ3度の食事を食べさせ、容器を空にさせた。しかし始皇帝の死は7月、死臭が漂い始めた。そこで皇帝はこの地の魚が殊のほか気に入り、塩漬けにした魚を大量に持ち帰りたいと命じたと言って、死臭を塩漬けにした魚の悪臭で誤魔化し、咸陽にたどり着いた。

偽造された詔書を受け取った扶蘇は自殺しようとするのを、蒙括は偽りの使者かと疑い推し留めたが、扶蘇は「父から死を賜った、子として恩赦を請えるのか」と言って自殺した。蒙括には弟蒙毅が大罪を犯したとでっち上げ蒙括も連座させて殺した。胡亥・趙高・李斯の3人は安堵して始皇帝の喪を發表し、胡亥が二世皇帝となった。

### 3 驪山始皇帝陵

始皇帝陵は西安の東、驪山（リザン）北麓にある。始皇帝は首都咸陽から、この驪山まで閣道（カクドウ）と呼ぶ専用の行幸道を造った。始皇帝陵の中心墳丘は東西345M、南北350M、高さ43Mでほぼ方形この墳丘を取囲む内域（内郭）はほぼ方形で東西578M、南北684Mで3方に門の跡がある。外域は東西974M、南北2173Mの細長い長方形で内郭は外域の中心より南に寄り北半分は大きな空間がある。内域・外域の城壁は黄土を強く叩き乾燥させた版築と呼ぶ煉瓦を使用した。墳墓は地下30M、地下10階ほどの深さに掘り下げた穴の中に地下宮殿・望楼・百官の席・倉庫等の全ての物が備わっていた。地下宮殿は東西170M、南北145Mの長方形でその中に墓室がある。この墓室は石灰岩の厚い壁で覆われ、太陽熱は届かず地温は常に10度前後で一定している。盗掘する者があれば自然に矢が飛び出す装置を施してあった。

始皇帝の遺骸がこの驪山に葬られたのはBC210年9月、始皇帝の崩御2月後であった。この陵墓

は始皇帝の死後、4年目に項羽の軍に暴かれて埋葬品は持ち去られた。その後迷い込んだ羊を追った牧童が地下宮殿を焼いたと言う。

また2000年に外域の東北の地下で、青銅製の鶴・白鳥・雁等の水鳥や、それを飼育する官吏の俑がある水鳥坑（7号坑）が発見された。

#### 4 兵馬俑（ヨウ）の発見

1974年外域の東1・5KMの場所で始皇帝の死後を守る兵馬俑坑が発見された。

#### 5 私の「始皇帝陵考」（始皇帝陵の範囲拡大）

兵馬俑坑は4つの坑からなっている。1号坑は歩兵・戦車兵混合の主力軍、2号坑は軌道部隊、3号坑は指揮部、4号坑は未完成でも埋めていない。兵馬俑は全てが発掘されているわけではないが、既存の発掘面積の兵馬俑の密度から、1号坑は約6000体、1と3号坑の全てを合わせると8000体あると言われている。

明治末期頃までは始皇帝陵の遠景の写真があるだけで、墳丘の測量図等はなく、周囲は麦畑や何処にもある農村の田舎風景が続き、地上には何の目印もなかったらしい。ところが1974年外域の東1・5KMの西揚（セイヨウ）村で農民が井戸を掘っていると等身大の陶製の人物像、陶俑を発掘した。それが動機となり発掘調査が行われた。始皇帝陵は墳丘だけの認識から内郭と外郭を備える都市構造へ拡がり、外郭の外の俑坑群へ拡大し、現在では予想のつかない超広大な墓陵へと拡がった。

兵馬俑の顔は一体一体モデルがあるかのように誠に個性的で、豊富な髯を蓄えた者、額にしわを寄せている者、何か語ろうとする者、西方系の者、西域人、北方の遊牧民民族等々様々である。また内域、墳丘の麓の6号陪葬義坑からは長冠をかぶり、手を前で組み袖に入れ、毛筆で書いた竹簡の文字を修正時に竹簡を削る小刀と砥石を腰に下げた8体の文官俑が出土した。

#### （なぜ広大な始皇帝陵を造営したのか？）

始皇帝陵は秦の都咸陽から東方50KM離れた驪山の麓にある。近くには玄宗皇帝と楊貴妃で有名な温泉華清池があり、驪山の離宮

はあるが日常の居住地ではない。どうして始皇帝は都咸陽から遠い、この地に自分の陵墓を造営しようと思ったのか？ これは始皇帝の出生に原因があると私は思う。当時の王墓や諸侯の陵墓は都の隣接地に一族の者や將軍等の陪墳を伴う古墳群を形成しているのが通常で、秦王室の陵墓も首都咸陽の周辺にあった。

始皇帝は秦王莊襄王の子とされるが、莊襄王が子楚といって趙の人質として邯鄲に居た時、韓の大商人呂不韋（リョフイ）は「奇貨居くべし」と子楚を援助した。当時呂不韋は邯鄲で美女と同棲していたが、子楚が彼女を見染めた。その時彼女は呂不韋の子を妊娠していたが、秘して子楚に献じた。その子、政が後の始皇帝である。子楚は呂不韋の助力により孝文帝の太子となり、即位して莊襄王となったが3年で崩御した。政は秦王に即位する。秦王政は呂不韋を宰相として内政を任せた。秦王政は母太后の淫欲から生じた「嫪アイ（ロウアイ）事件」により、自分の出生の秘密を知る。この時秦王政は自分が秦王室とは血の繋がりが無いことを悟り、秦王

室の墳墓に祀られる事を諦め、秦の都咸陽から50KMも離れた驪山の麓に、自分を祖とする秦（帝）室の墳墓の造営を考えた。そのため始皇帝は自分以前の者を祀る必要がなく、自分が祖であるから単独の超大型の陵墓を造営する事にしたのであろう。

#### （始皇帝陵は何時造られたか？）

私はこの始皇帝陵が、地下宮殿、兵馬俑坑が何時造られたか興味を持つ。「史記」の「秦始皇帝本紀」には始皇帝が即位した時、陵を造るため驪山の麓に穴を掘り、天下統一におよび天下の徒刑者70余万人を労役したとある。

陵を驪山の麓に決めたのは即位後間もなく自分の出生を知った時、また本格的に造営を始めたのは天下統一後であろう。天下統一後の始皇帝にとっての大問題は亡国の残存兵力・捕虜の処理であった。これらの兵が反抗すれば帝国崩壊の恐れがある。私は始皇帝の造営は6国の残存兵力、捕虜の処分の一貫であったと考える。

（4号坑は何故なにも埋まってい

ないのか？)

私は4号坑にはなにも埋まっ  
ない事が気になる。8体の文官俑  
が出土した6号陪葬坑は墳丘の麓、  
始皇帝陵造営の早い時期、始皇帝  
の命により創造されたものである  
う。これで中心の墳丘、内域地、  
地下宮殿はほぼ完成した。そして  
外域および外域周辺の造営に着手、  
その1つとして外域の東北に青銅

製の鶴・白鳥・雁および水鳥を飼  
育する官史の俑の水鳥坑を作成し  
たのであろう。始皇帝の天下統一  
時の戦陣・始皇帝死後の咸陽を防  
衛する軍隊の兵馬俑を大量に造営  
するには水鳥坑のように青銅製で  
は手間と費用が掛かる。そこで陶  
による兵馬俑の作成としたのであ  
ろう。1く3号坑は合わせて80  
00体の兵馬俑は、始皇帝の命に

より、始皇帝の生存時および二世皇帝により造営された。そして4号坑には何も埋めていない。

人物中国の歴史4 「長城とシルクロードと」  
司馬遼太郎

4号坑が空なのは二世皇帝時に陳勝・呉広の農民反乱の混乱により完成しなかったのもであろう。陳勝・呉広の反乱が無ければ4号坑には何を造っただろうか。歩兵・戦車・騎馬兵の主力軍の1号坑、軌道部隊の2号坑、指揮部隊の3号坑、

集英社

これで軍隊の必要部隊は揃っているが、私には何か足りない部分があるように思われた。そうだ、始皇帝が居ない。始皇帝が居て初めて秦帝国軍隊なのだ。4号坑は6頭立ての馬車に乗って閲兵する始皇帝と皇帝を護衛する近衛の部隊を創造する予定であったのではなからうか。（完）

平成28年10月 記

### 参考文献

「新十八史略（天の巻）」

常石 茂他 河出書房

筑摩世界文学大系6・7「史記」・

「」 小林文夫・小竹武夫訳  
筑摩書房

中国の歴史03 「ファーストエン

ペラーの遺産 秦漢帝国」

鶴間和幸 講談社